

大学史料室通信

農大

創刊準備号
2011.10.31

刊行に当たって ― 大学史料室の役割 ―

世田谷学術情報センター長（図書館長）

友田清彦

第一二〇回収穫祭を目前にして、『大学史料室通信』創刊準備号を皆さまの手元にお届けいたします。本紙は、東京農業大学世田谷学生サービスセンター学術情報センター（図書館）大学史料室からのお便りです。

さて、大学史料室とは何でしょうか。「東京農業大学図書館規程」を見ても、大学史料室については何も触れていません。その名称も見当たりません。大学の組織の上では存在していません。ところが図書館には、大学史料室という部屋があります。つまり、今のところ、大学史料室は組織ではなく、単なる部屋の名称に過ぎないのです。実際に大学史料室の運営に当たっているのは、図書館事務室の情報管理部です。

大学史料室は、もともとは大学史料の收藏室（收藏庫）に過ぎず、人員も配置されていなかったのですが、ここ十年ほどの間に、情報管理部の職員が常駐し、他の職務とあわせて史料室の業務を遂行するようになりました。

大学史料室が所蔵している史料は多種多様です。農大の二人の学祖、榎本武揚先生や横井時敬先生の遺品・関連史料はもとより、農大の歴史にかかわるあらゆる「もの」が集められています。たいへん残念なのですが、このことは教職員の方々の間では、意外に知られていません。また、せっかく貴重な史料を所蔵しながら、人員や予算の関係で、その整理や保管、収集のための体制作りも遅々として進んでいないのが現状です。

昨年は横井時敬先生生誕一五〇年でした。そして、今年も東京農業大学創設一二〇周年、数年後には一二五周年がやってきます。新図書館の実現も先が見えてきました。こうした中で、大

学史料室の果たすべき役割はますます大きくなってきています。本紙を通じて、読者の皆さまに大学史料室についての認識を新たにしていただければ幸いです。なお、本紙は来る二〇二二年（平成二十四年）四月に正式に創刊される予定です。



鈴木梅太郎博士のオリザニン及びビタミン類の天然抽出物・合成サンプル試料
東京農業大学「食と農」の博物館所蔵

日本農芸化学会主催

鈴木梅太郎博士ビタミン B1 発見 100 周年祝典・記念シンポジウムにて展示予定

表彰者	
大日本農會 勲章	三井八郎右衛門君
東京 男爵	三井八郎右衛門君
同 勲章	藤生太吉君
同 勲章	伊藤昌次郎君
同 勲章	兵衛 隆
同 勲章	伊藤昌次郎君
功勞者	
金杯 壹組	農學博士 横井 時敬君
同 壹個	同 恒藤 規隆君
同 同	同 鈴木梅太郎君
同 同	同 吉川 祐輝君
同 同	同 岡崎 慶郎君
同 同	同 石坂 橋樹君
同 同	同 中島 信成君
同 同	同 農學士 佐々木祐太郎君
同 同	同 前教授 理學士 佐々木忠次郎君
同 同	同 教授 理學士 石田 敬藏君
同 同	同 農學博士 澤村 眞君
同 同	同 農學博士 岡村精之助君
同 同	同 農學博士 佐藤 寛次君
同 同	同 農學博士 麻生慶次郎君
同 同	同 教授 古市 末雄君
同 同	同 川村雄二郎君
同 同	同 子爵 野村 金三君

*大日本農會報
第五〇四号(一〇四頁)

鈴木梅太郎ゆかりの実験室建屋は

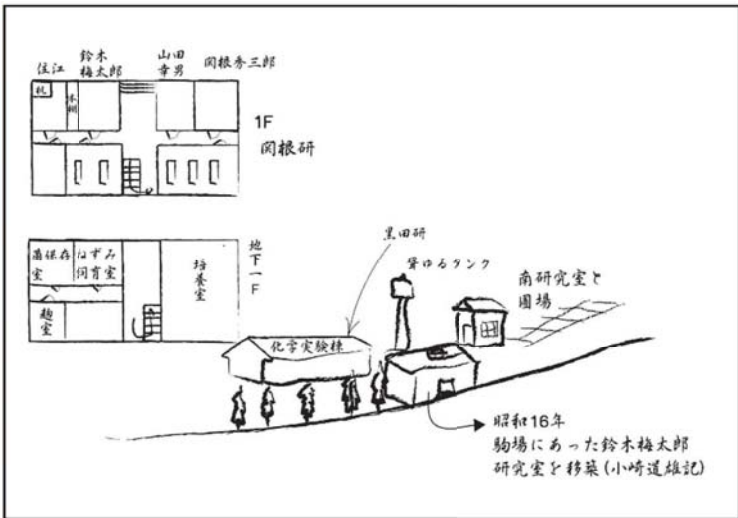
農大常盤松に移転されていた

一九三六年(昭和十一年)当時、鈴木梅太郎の好意で、駒場(東京帝国大学農学部の本郷への移転は昭和十年七月)にあった、オリザニン発見にゆかりの木造平屋実験室(旧鈴木梅太郎研究室)の建物は渋谷常盤松の東京農業大学に寄付、移築されましたが、戦火により残念ながら焼失の憂き目に会っています。しかし、移築のお陰で東京農業大学にもようやく関根秀三郎先生と住江金之先生が入る研究室体制が出来たことや、後に研究室を継がれた佐橋佳一先生や元学長の鈴木隆雄先生によるお陰で、当時の日本の化学力を偲ぶ貴重な試料である「オリザニン」関係及びその他成分が本学に寄贈されました。これらが今日の生物応用化学科(旧農芸化学科)の持続的な隆盛に繋がる礎になっています。

一九二五年(大正十四年)大学昇格のための建設資金として鈴木梅太郎は一万円を大学に寄贈し、十月十四日午前十時より挙行された東京農業大学昇格祝賀会では、貢献の高かった学長横井に金杯一組、鈴木梅太郎を含む四名に金杯一個が贈呈され、功勞者の一人として表彰されています。



*昭和13年頃の化学教室



*鈴木梅太郎研究室の建物内見取り図と移転後の様子

もう一人の知の巨人 白井光太郎博士

東京農業大学国際食料情報学部教授

夏秋 啓子

白井光太郎(しらい みつたろう)博士は、一九〇六年(明治三十九年)に設置された東京帝国大学農科大学(のちの東大農学部)植物病理学講座の初代教授である。博士は東京農業大学においても教鞭をとり、「私立農業大学ニ於テ一週一回二時(間)植物病理学講義受嘱ノ件許可ス」という一九一二年(明治四十五年)三月付の書類も残されている。東京帝国大学に世界で最古となる植物病理学講座ができてから、わずか六年後、本学の植物病理学教育の歴史も大変長く、高い水準だったことがうかがえよう。

白井博士は植物病理学に限らず、様々な分野で活躍した「知の巨人」であった。学生時代には友人とともに、東大農学部近くにあった貝塚で弥生式土器を発見した。また、縄文式土器の名称を唱えた最初の人でもあった。植物学者としては全国で採集し、恵まれた画才により彩色の記録を多数残している。植物病理学者としての著書や論文に加えて、日本の博物学についてとりまとめた著書も有名である。本草学にも詳しく、長寿のために自らが煎じた毒草トリカブトの服用が、博士の死因でもあった。

本学では現在、白井博士の書簡、写真、彩色図、原稿、蔵書印など多数を蔵している。幼少のころの大人顔負けの習字からはじまり、色あせない植物画、菌類の観察図、ユーモアが感じられる調査旅行スケッチなど見飽きないものばかりである。ドイツ留学時代には、母の達筆だが細かい字がびっしり書かれた手紙に、白井博士がこまめに返信しており、微笑ましいとともに、育ちのよさが偲ばれる。粘菌研究で有名な

東京農業大学図書館大学史料室に

鈴木梅太郎を探る

東京農業大学応用生物科学部教授
田所 忠弘

今年、日本食文化の世界無形遺産登録の動きを始めた様々な歴史的文化遺産の発掘・保存が盛んに行われようとしている最中、鈴木梅太郎博士ヒタミンB1発見百周年祝賀事業が社団法人日本農芸化学会主催により開催されます。さらに、公益社団法人日本化学会による人物の遺産登録に鈴木梅太郎が推挙され、認定審査中であることなど、鈴木梅太郎が大変注目を集めています。

生物応用化学科(旧農芸化学科)が百年の歴史を迎えるにあたり、学科でも資料整理の必要性から鈴木梅太郎の直系研究室の一つである栄養生化学研究室がその調査の任を担うことになり、早速に内村泰名誉教授の大いなる協力のもと本学図書館大学史料室にもご協力頂きながら鈴木梅太郎と東京農業大学に関する調査、資料収集を開始、約半年間その作業を進めてきました。その結果、まだ一部ではありますが、鈴木梅太郎がいかに農学における化学普及に力を注いでいたか、また、東京農業大学にその実践面をいかに期待していたか等々、実際にも粉骨砕身、農業大学に対して尽力されていた様子が次第に浮き彫りになってきました。そこには世間一般に語られ、知られている表面的業績とは少し異なり、日本農業の今後を考えたつ農学博士として食物の栄養化学の普及、食生活への反映に至るまで生活に密着した化学そのものの応用を刻苦勉勵精神にて実践的にも展開、行動していた姿が浮かび上がり、東京農業大学と鈴木梅太郎の深い関係を窺い知り得る大変貴重な

資料が少しずつ見つかってきています。

今回は、紙面の関係上、その一端についてのみ紹介することになりました。なお、十一月二十五日に東京大学安田講堂で行われます鈴木梅太郎博士ヒタミンB1発見百周年祝賀シンポジウムには、学校法人東京農業大学理事長と東京農業大学学長の重責を担っている大澤貫寿先生も招待されており、恐らくご挨拶の中でも東京農業大学との関係について触れられるのではないかと拝察しています。

農大でも教えていた

一九〇一年(明治三十四年)鈴木梅太郎二十七歳の年の七月十五日は東京農業大学の前身である大日本農会附属東京農学校が大日本農会附属私立東京高等農学校へと改称された時ですが、当時倫理学の授業担当教員は教頭横井時敬、有機化学他二科目講師に山県宇之吉、科外講師に農学博士鈴木梅太郎とあります。

また、一九〇九年(明治四十二年)渋谷村常盤松御料地から東京渋谷区宇田川町に転居していた肥料分析技術員養成所が三月二日にその名称を肥料分析講習所と改め、横井時敬の助成を得て、私立東京高等農学校内に移転されています。この時、三三歳の鈴木梅太郎は植物学(栄)養論を担当、さらに五月一日には、肥料分析講習所の所長に就任しています。

許可すといふ其學科及擔當講師は次の如し

植物營養論	農學博士	鈴木梅太郎
農用細菌學及分析化學	農學士	黒野勘六
農藝化學	全	岡崎寅吉
料及土壤學	全	木田芳三郎
肥料鑑定論	農商務技手	小林傳四郎

*大日本農會報 第三四〇号(七三頁)

青山ほどり常盤松 譽ゆるタンクは我母校

一九一七年(大正六年)七月十五日渋谷常盤松校舎化学実験用タンクの建設(費用二〇七六円三二銭五厘)にあたり、鈴木梅太郎自身は五百円を寄付、化学実験用給水塔設置に大きな支援をしています。

○化学實驗用タンクの建設

茲に圖を掲げたる化学實驗用タンクは大正六年二月竣工したるものにして其鐵骨塔の高さ地上四拾尺、鐵製タンクは四尺立方なり。揚水にはT Y 複式ポンプを使用し馬力モートルの電力に依り之を運轉す。
右設備中鐵骨塔及鐵製タンクは三松合資會社長横山長次郎氏の寄附に係り、其の他の設備中五百圓は農學博士鈴木梅太郎氏の寄附なり今左に建設經費を掲げて參考に資せんぞす。

タンク建設經費	タンク建設費總額
一金貳千七十六圓三十二錢五厘也	
内 譯	
金九百八十五圓也	鐵骨塔及鐵製タンク見積價格
金百九十四圓八十四錢也	タンク建設工事費
金四百八十五圓五十錢也	ポンプ、モーター價格並ニ地下迄の配水設備費
金百壹圓十四錢也	モーター器械至一棟建築費
金百四十七圓七十錢也	實驗室内へ配水設備費
金七十九圓五十錢也	電氣動力線工事費
金八十二圓六十四錢五厘也	鐵材部ペイント費、鐵管防寒裝置水 量報知設備其他雜費

*大日本農會報 第四三三号(九〇頁)

大学建設への資金援助

一九二三年(大正十二年)七月一日、鈴木梅太郎ほか農芸化学部卒業生有志の寄付により教室が新築、拡張落成式が挙行されています。木造スレート瓦二階建て六十五坪の教室に新築(二一四・八九平方メートル)されました。

南方熊楠や植物学者牧野富太郎からの書簡や記念撮影写真、さらには、アメリカ農務省の著名な植物学者 W.T.Swingle が来日時、東京神保町に一緒に古書を買に行こうと白井博士の都合を問い合わせる築地精養軒ホテルからの葉書など、幅広くグローバルな交友関係を示す資料も多数含まれている。

なお、これらの資料は、白井博士のご子孫が大切に保存されていたが、それを手放す決心をされ、人を介して、博士にゆかりの東京大学と東京農業大学図書館とに連絡を頂いたものである。その価値にいち早く気付いた出町明氏(平成二十三年退職)がすぐにご子孫宅に赴いて大方の分譲を受け、本学図書館蔵とすることになった。幸い、図書館における整理が進み、書簡ほかに登場する人名や内容の多くが、白井博士の業績についての著書もある山田昌雄博士のご教示により判明している。しかし、まだ解読されずにいるものも多いのが現状である。分譲して下さった白井博士のご子孫に篤く感謝するとともに、本学と、資料の多くを保管している東京大学において全貌の解明が行われ、研究者にも利用されるようになることを期待している。さらに、閉塞感の漂う日本であるが、白井博士の人となりや業績を通して、かつての日本にこのようにダイナミックな“巨人”がいたことをより多くの方々に知ってほしいと願っている。



*「白井光太郎コレクション」の一部

編集後記

本号では、生物応用化学科の田所忠弘先生に、ビタミンB1の発見で知られる鈴木梅太郎について、また国際農業開発学科の夏秋啓子先生に、わが国における植物病理学の先駆者で、本草学史の研究でも著名な白井光太郎についてご寄稿をお願いしました。鈴木梅太郎も白井光太郎も、日本を代表する世界的な農学者です。そして、いずれもわが東京農業大学とは深い関係がありました。初期の東京農業大学を支えたのは、日本における近代農学の草創期を担った多くの農学者たちでした。東京農業大学の歴史は、近代農学の歴史でもあるのです。本紙では、今後も大学史料室所蔵の諸史料について紹介していく予定です。

* 右の写真は、一九五九年(昭和三十四年)の第六十八回収穫祭のポスターです。大学史料室ではこのような史料も所蔵しています。大学史料室所蔵資料をぜひご利用いただきたいと思えます。

本文中で*印の付いている資料は当史料室の所蔵資料です。



当史料室では東京農業大学史に関する資料をひろく収集しております。東京農業大学史関係資料や、各種情報などがございましたら、どのようなことでも結構ですので、左記まで一報くだされば幸いです。

東京農業大学

世田谷学術情報センター(図書館)大学史料室

〒156-8502

東京都世田谷区桜丘1-1-1

電話… 03-5477-2526

FAX… 03-5477-2639